

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第396回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

大学生活4年目を迎えた最後の夏休みに、滋賀県近江八幡市を訪れた。同市は琵琶湖東岸に位置し、安土城や八幡堀などのほか近江商人が活躍したことも知られる。日本の歴史を今に伝える風情あるまちである。現地調査の暑さを凌ぐ場所を探す中で、住宅街に店を構えるカフェにたどり着いた。敷地前面の生垣の端に小さな看板と漆喰塗りのゲートがあって、隠れ家のようになっている。

ゲートの正面に立つと、中にもう



前崎 友佑
不動産学部4年

異文化が融合するヴォーリス建築

一つ同じ造りのゲートがあり、和風庭園と乱張りした石の通路が続いている。建物はおいしいフルーツパフェを食べることができるよう古い民家をリノベーションしている。既存の建物を真新しいカフェにしている点がこの建物の第1の融合である。

カフェといっても、元々の経営がアパレル業だったことから、店内にはアパレルブランドの雑誌を取りそ

多様な人がアレンジし継承

るえて、異文化の融合を演出している。これが第2の融合である。

更に、アパレルとフルーツパフェ

の共通点を、五感で最高のものを楽しむことに設定し、食器や茶器にもこだわりの逸品をそろえている。これが第3の融合である。店内はとても静かで若年層というより、中年層に好まれるような印象があった。

店に入ると田舎の祖父母の家似

た落ち着いた雰囲気を感じる一方で、どこか新鮮さを覚えた。建物の設計者が「日本の西洋建築の父」ウィリアム・メレル・ヴォーリスで、和風ながら日本の伝統建築には見られない空間になっていることがその理由だ。これが第4の融合である。

米国出身のヴォーリスは来日後、

建築家としての活動のほか、「青い目の近江商人」としてヴォーリス合名会社（近江兄弟社）を創設してメンソレータムを普及させる、プロテスタントの伝道師としてYMCAの活動をするなど多面的に活躍した。

日本人女性と結婚して帰化し、長く近江八幡で過ごしている。

1929年に個人住宅として建築

された建物は、多様性を背景とする個性的な空間が注目され、日本食レストラン、米国人陶芸家によるカリフォルニア料理レストランに利用され、今はフルーツパフェで人々を魅了している。ヴォーリスの「建物の風格は、人間と同じくその外観よ



古民家をリノベし新たな魅力に

りもむしろその内容にある」という信念が多様な人にアレンジされて引き継がれている。ひとつの建築とその利用が歴史と文化の厚みを創り出している。

【教員のコメント】

大正デモクラシーを背景に伝統的な設計作法や美観からは逸脱しつつも破綻せず、むしろ斬新なアプローチが今に貴重だ。その美と精神性を尊重し、後々の人々が時代の感性を尽くして原作者の作品に書き添えし続ける点は建築独自の芸術性だ。